

# 包括的知識： 新儒教の「理」の原理と統一認識論

トマス・セローバー

韓国・清心神学大学院教授、米国

認識論における意義ある疑問の1つは、異なる秩序の知識を知識の同じ方法論と体系の下でどの程度まで理解することができるかということである。外部の事物についての知識、自分についての知識、他人についての知識、霊的存在についての知識の正確な知識を同じ認識論の体系で理解することができるであろうか。統一認識論はそれができると主張する。本論文で私は、統一認識論と伝統的な新儒教の認識論を比較することによってこの主張を探求し、発展することを提案するものである。

## 序論

統一認識論を含む統一思想の説明はこれまでに出版された様々な書籍の中で、西洋哲学における主要な流れ、特にイマヌエル・カントとカール・マルクスの思想との対話の中でかなりの程度に発展してきた。本論文は、東アジアの哲学の中で見出だされてきた世界の他の知的伝統との比較の中で統一思想を探求し発展させることも実りがあるという前提から始まる。従って、本論文は統一思想と新儒教思想の間で共鳴するいくつかの点を探求しようとするものである。

統一思想と同じように、新儒教思想は、認識論においては現実主義である。統一主義と新儒教の両者とも、我々が自分の周囲で知覚する世界はそれを知覚し認識する人間主体とは別に存在すると確信している。<sup>2</sup> 両者とも人間の認識は心を越えた現実世界の本当の知識を提供することができるし、提供していると言う点で一致する。歴史的に、新儒教の信奉者はこの点を強調する。なぜなら当時の彼らのライバルであった仏教徒たちがそれを否定していたからである。本論文の目的のためにいえば、現実主義（リアリズム）が統一思想の認識論と新儒教の認識論を比較するための共通基盤であると理解できるであろう。

本論文は知識の四つの分野、すなわち、外部の事物についての知識、自分についての知識、他人についての知識、霊的存在についての知識をそれぞれ考慮しながら進行する。それぞれの分野に関して、新儒教と統一思想のアプローチを比較する。これらの四つのセクションの後、知識に影響を与える限界や歪みについて簡単に調べ、それから、本論文では知識の目的について、

創造原理に照らした議論で締めくくることになるだろう。

## A. 外部の対象に関する知識

伝統的な新儒教の認識論は、初期の儒教思想を知識の可能性に関する一貫した、いくらか合理的な説明の方向に向って拡張した。新儒教の認識論はその全体的なアプローチにおいては「前科学的」であり、もともと中国の宋王朝の時代(特に11世紀と12世紀)に生まれ、その後、さらに中国だけでなく韓国や日本で発展した。この哲学的観点は、「理」という根本的な組織概念にちなんで「理学」として知られるようになった。東アジアの思想史では、それ以前にも、書き物や試験論文において、「秩序」ないし「秩序性」の線に沿って、「理」という用語が用いられたこともあった。しかし、新儒教思想家の手によって、「理」は「ある物がそれによってそのものになるもの」とか、「それがそうであるべき基準」と同一視されるようになった。

朱子(朱熹 1130-1200)は、新儒教思想を体系化した偉大な思想家であるが、「理」を彼の哲学のアプローチの基盤であると考えた。朱子は活力エネルギーより論理的に優先する「気」について語っているが、物の中および物の原理としての「理」は言葉や定義に単純化できるものではない。新儒教思想においては、「理」は、それらの原則原則(知性による理解可能性)を理解する人間の能力のみでなく、自然界の固有の原理原則を意味する。新儒教思想にとっては、「理」は単数かつ複数である。「理」は経験の世界に根本的に内在するものである。

客観的な現象としては、「理」は特定の事物の「原理原則」または「パターン」として知覚できる。朱子は、「理」の認識は事物の調査(格物)の過程を通して起こると教えた。「格物」という考えは、新儒教を学ぶ指針として新たに重要になった「大学」として知られる古典的な儒教のテキストに基づいている。「大学」の八段階によると、「格物」は「知識の拡大」(致知)に導く。朱子にとって、「格物」による知識の漸進的な拡大は原理的な学習のための基本的な公式である。

ある実体がどのような実体であろうと、それに対応して、それを説明し、処方する「理」が必ず存在するに違いない。それと同時に、「理」はまた、万物を結合させる一つの統一の原理である。この新儒教の洞察は「原理は一つであるが、顕現するものは多い」という哲学の公理にまとめられる。普遍的なものとしての「理」は、万物は結合されており、一緒になって意味あるものとなることを意味する。新儒教の信奉者にとって、この連結性と粘着性と一貫性を突然自覚することが包括的な知識を達成したサインなのである。

統一認識論に目を向けると、「理」の概念が統一原理および統一思想の根本的な組織概念であることはよく知られている。それにもかかわらず、統一認識論は普通、西洋の認識論と比較して説明される。そのために新儒教との統一思想の間の「理」の理解の類似性と差異がまだ十分に探究されてはいない。その代わり、統一認識論はその根本的な洞察について説明するために一連の異なった基本用語を用いる。

統一認識論は「万物」間の外部の対象に関する正確な知識を強調する。統一思想に関する最新の刊行物では、外部の対象を正確に認識するより優れた説明を提供するという統一認識論の主張を支持するために、大脳生理学の材料を加えている。これは我々がこの論文の中で考慮している知識の四つの分野の中で統一認識論が最も発達している部分である。

外部の対象に関する知識のメカニズムについて説明する際に、統一認識論は「認識の目的」の説明から始め、物理的対象の形、重さ、長さ、動き、色、音など、測定可能な特質または属性に焦点を当てる。統一認識論はこのような属性のアイデンティティに基づいて、自己の体の細胞にも同じ特質があるという認識を根拠に、そのような外的対象の「原意識」(protoconsciousness)を仮定する。

統一思想要綱では次のように説明されている。

主体の心の中の内容が原型であり、あるいは、もっと正確に言えば、内容に相応する原型のその部分である。これは「原イメージ」のことであり、原意識の中に現れる。原イメージは人体の属性に相当して存在する心のイメージである。

人体は物理的宇宙の小宇宙のように、人間の心と知識の外的な対象との間の「媒介体」とみなされる。このアプローチの強みは、それら外的な対象を「認識」するための堅い基盤を提供することである。

人体の細胞を基礎とする原型に関しては人間と万物が連結しているが故に、統一認識論では、「万物」について完全に正確な知識を得ることが可能であるだけでなく、確実であるという確信を次のように示している。

さらに、人間と万物は主体と対照の関係にあるので、私たちは完全かつ正しく万物を知ることができる。

統一認識論は、人間の認識にはいかなる理論上または絶対的な限界もないことを肯定しているように見える。万物は本来知ることのできるものであり、人間の心は知識を得るよう準備(または、設計)されている。人間の認識に関するこのような重要な肯定は統一原理の創造原理によって十分に支えられている。

「原型」に関して説明されている知識を得る能力は、認識が行われるために必要であるが、充分ではない。認識の主体にとってさらに必要な要素は統一認識論で「関心」として説明されている。この「関心」、または知識を広げたいという欲望は私たちが既に知識を持ち、世界をあるがままに明らかにしているという確信によって刺激される。主体の側の関心は、「原型」の存在と共に、統一認識論(および統一思想全般)の核心にある「授受」のプロセスを通じた認識の可能性を提供する。

授受法、すなわち、主体と対象との間の授受の原理が統一認識論の方法論である。

従って、統一認識論は「授受」の認識論として知られる。統一認識論はさらに、「授受」のメカニズムとプロセスを「照合」という形で明白にする。

認識は心の中の原型(内的イメージ)と外部の対象(外的イメージ)から来るイメージを照合するときに起こる。

統一思想の本が指摘するように、認識の説明としての「照合」法は、経験主義と合理主義の認識論の両方の強みを統合するものである。

統一認識論が万物の「原型」の一貫した特性を、陽性と陰性および内的と外的の二性性相として具体的に特定することができることは意義深いことである。これらの二性性相はさらに実際に存在しているものにおいて相対的な関係を形成する。このように、相互関係は認識の対象および知覚と認識自体の原理および方法の両方の特徴でもある。

適切に知覚されると、私たちが認識において見出すものは、「相互関係」、すなわち、現実のあらゆるレベルにおけるペア・システムである。言い換えれば、私たちは、雌雄の動物や植物におけるペア・システムのように、万物の世界においても相対性と相互関係を知覚するようになる。それと同時に、統一認識論によれば、知覚や認識が照合のプロセスを通して可能であるのは、相対性と相互関係自体を通してである。それ故、人間の認識は、また、人間の自己理解において「道徳的な知識」であるということもできる。すべての知識は道徳的な知識である。なぜなら、それは人間であることを意味する核心にある根本的な相対性と相互関係を教え補強してくれるからである。

新儒教の「理」の概念と統一思想の「原型」の理解には、家族的な類似がある。これらの概念にはそれぞれ正確な認識はいかに可能かを説明する役割がある。これまで見てきたように、「理」は複数でもあり、単数でもある。それぞれの「物」にはそれに相対する「理」があり、同じように「原型」がある。しかし、同時に、すべての「理」は、万物の原理またはパターンたる一つの「理」として理解される。同じように、統一認識論の諸原型は、一つ一つの物についての正確な知識を許容するが、しかし、また、それらは(単一の)人体のパターンに基づいているが故に、すべてがお互いに一貫しており、個々の物に関する正確な知識だけではなく、一貫性のある意味深い宇宙をも作り出す。

統一認識論が外部の諸物に関する知識について優れた説明を提供していることは明らかである。外部の対象について知る可能性とそれらの知識が人体の小宇宙に基づいて意味ある宇宙を形成するのに一貫している仕方の両方を描写することにおいて、その説明はより詳細であり、ニュアンスがある。かくして、統一認識論は新儒教の認識論ではあいまいなままにされている外部

の諸物に関する知識の多用な面を明確にしているのである。

## B. 自己知識

前のセクションで、外部の物に関する正確な知識の根拠の取り扱いにおいて新儒教の認識論に勝る統一認識論の優越性を指摘した。知識の他の分野に目を向けると、本論文は、新儒教の認識論は他の分野について明確の説明においてそのさらなる発展を刺激することによって統一認識論に貢献することができることを示唆することになる。

伝統的な新儒教の認識論は、正確さのいくつかの要素を欠いており、全体的なアプローチにおいては「前科学的」であるが、外的な調査と内的な自己の知識との間の基礎的な結合上に引き出すことの利点を持っている。朱子は「格物」を彼の知と行の新儒教理論の基礎としたが、さらに詳しく調べてみると、それは本来、自然科学の方向に導く「万物」の実証的な調査ではない。

実際には、朱子は道徳的な自己修養に拍車をかけることのできる種類の自己知識に対する興味よりも、自然界の諸物に対する興味は少なかった。朱子は自分の弟子に知識の多い調査と拡大のための核心的な項目は儒教の古典や文化的精神的な伝統についての他の重要な書物の中に見つけるべきであることを知らせた。したがって、知識についての新儒教の議論は、道徳的な知識と行為および自己修養の活発な実践へ非常に速く導く。朱子による新儒教の思想体系は中国と韓国の両方を支配するようになり、個人の知識や自己修養と外的もしくは「科学的」知識を求める比較的弱い勢いとの間の強いリンクを提供した。

「理」の概念が宋時代の思想家の間で哲学的な基盤を獲得するにつれて、それは初期の儒教思想(紀元前 5-3 世紀)の古典時代から議論されてきた人間性自体の根本的に善なる性質と同一視されるようになった。孟子に続いて、新儒教の思想家たちは、人間性が現実のものであり善なるものであり、善良さの「4 つの芽」の場所であることを再び肯定した。

孟子の有名な例えである「突然、井戸に落ちようとしている子供を見て、同情と警戒心を感じる例は、人間の親切心の「芽」もしくは始まりである自然発生的な反応の鮮明さを例証する。この自然発生的な反応はすぐに認識できるものであるが、それは特定の場合と結びついている。新儒教の思想家たちは、このような自然発生的な善良さのこの古典儒教の例を、「理」の新しい組織パターンと結びつけた。その効果は、自分自身の本来の善なる性質の「可知性」を自己知識の基盤として強調することであった。

新儒教がこの洞察を特徴付けるのに使用した要約用語は「性即理」であり、その意味は人間の性質は人生の基本的なパターンないしは原則であるということである。ちょうど外的なものには「それをそれたらしめるもの」があるように、人生にもまた定義パターンないし原則がある。「性即理」が意味するのは、個人の中にある「理」の存在場所は人間の本性であり、それは「仁義礼智」という四つの核心的な道徳的価値によって根本的に特徴付けられるということである。「本性」を

「理」と同一視した結果、根本的な人間の本来の善の性質が客観的な万物の世界にリンクされる。もしそうだとすれば、具体的な物の認識可能性は「理」という共有された概念を通して人間の道徳的な性質と緊密にリンクされる。この意味で、新儒教の観点からは、人生の道徳的な知覚から離れたり、断絶したいかなる適切な知覚もないことになる。

新儒教者にとって、「理」は自己修養に伴う種類の知識に最も明らかであり、賢人や聖人になるという最も高い形の人生に導いてくれるものである。かくして新儒教の認識論は、自分自身の内的性質に対する内省的な知識から始まり、世界の秩序の認識や、さらにそこから詳細な万物の認識へと拡大する。

朱子とその弟子たちは人間の意識の中にある道徳的な心（「道心」）と普通の人間の心（「人心」）を区別した。彼らは道徳的な心の「微妙さ」に懸念を抱いていた。それはすなわち、自分自身の道徳的な心についての確信ある知識は、考えたり想像したりする傾向よりもはるかに難しいということの意味していた。普通の人間の心の分野は地図のないあいまいさの中で危険なほどに誤導する可能性があると感じていたのである。

本来善なる人間性は自己知識のための出発点であるが、それは人間が自分について知る必要がある唯一の面ではない。人間の中には、反対の傾向、悪なる傾向さえもあり、自分を管理するための自己修養を必要としている。儒教思想の初期の教えの中には、人間の性質自体が悪であると主張したものもあった。新儒教者は、その見解を拒絶して人間性の善なることを主張したが、それにもかかわらず、彼らは利己的な人間の欲望として描かれる不健全な傾向を認識していた。（セクション E を参照）自己知識を深めることは自己修養の必要性をより深く知ることに導くものであった。

統一思想では、人間の性質は「本性論」において説明されている。人間の性質については 2 セットの二性性相である内性と外形、陽性と陰性などについて詳細な記述がある。統一認識論への質問は、いかにしてこれがそうであることを知るようになるか？ 本性論がある人が自分の人間性を正確かつ的確に説明していることをどのようにわかるか？ 本性論がどのように自己知識の内容になることができるか？ 1 つの重要な手がかりは認識と主管を連結することによって提供される。

認識は主管と密接に関連している。認識なくして主管はなく、主管なくして認識もない。

自己知識の分野に適用すると、このことは、自己知識は自己主管とともに前進することを意味するであろう。

自己の身体それ自体に関する知識は確かに自己知識の一部であるが、しばしば過小評価されている。しかし、心と体の核心的価値観も自己知識にとって必須である。統一認識論によると、「生心と肉心の統一体である本心は価値（真善美）を指向しつつ、感覚や記憶を管理する。人間

の心の根本的な(善の)「原型」を特定することに関しては、統一認識論は、「心即理」(心がすなわち、固有の原理である「理」である。)と主張した新儒教思想の他の主流により近いところで発展するだろうと言ってもよいであろう。

新儒教と統一思想の認識論の両方にとって、心と体のこの試金石は、正統な自己知識に不可欠であるだけでなく、他の人々に関する本物の知識の基礎をも形成する。

### C. 他の人々に関する知識

他の人々に関する正統かつ検証可能で信頼できる知識は私たちにとって決定的に重要であるが、対象のために可能(適切)な「客観性」が人間と人間の間の知識にとって可能であると主張する人はほとんどいないであろう。その代わり、他の人々に関する正統な知識は単に外部の物にそのように適切であるというよりも一つの基準の知識を含まなければならない。

新儒教思想は人間の関連性とそれに伴う知識に関する初期の儒教の洞察に大きく依存する。他の人々について、そして又、彼らをどのように扱うかについて知る一つの古典的な儒教的な方法は「自らに対して類推すること」とハーバート・フィンガレットが翻訳した、「恕」の概念の中に見つけられる。フィンガレットはさらに、適切な類推は自分や他の人々のそれぞれの状況の間にあるのではなく、むしろ認識の主体としての自分ともう 1 人の主体の間にあると指摘する。

In his classic description of the “four sprouts” of goodness cited earlier, Mencius draws out the consequences in terms of both self-knowledge and knowledge of others: “To have these four sprouts but to say of oneself that one is unable [to be virtuous] is to rob oneself. To say that one’s lord is unable [to be virtuous] is to rob one’s lord.”

前述した善の「四つの芽」に関する古典的な記述において、孟子は自己についての知識と他人についての知識の両方に関してその結果を引き出す。すなわち、「これらの四つの芽を持っていながら、自分のことを[有徳であることは]できないと言うのは、自分を略奪することである。自分の主は「有徳であることは」できないと言うことは、自分の主人を略奪することである。」その意味するところは、他人を有徳であることはできないと見なすことは、その人から略奪することであるという意味である。したがって、この「四つの芽」の原理を他のすべての人々に広げることは、人が他の人々を彼らの核心的人間性として善の「四つの芽」を本当に持っていることを認めることを意味する。これがそれら他の人々に関する意味ある知識である。

Confucius said, “When I walk along with two others, they may serve me as my teachers. I will select their good qualities and follow them, their bad qualities and avoid them.”

孔子は言った。「私が他の 2 人と共に歩くとき、彼らは私の師として私に奉仕するかもしれない。私は彼らの良い性質を選択して彼らに従い、彼らの悪い性質を選択して彼らを避ける。」

For Confucian thought, knowledge of others thus provides an opportunity through reflection (similar to “collation”) to enhance self-knowledge as well.

儒教思想にとって、他人に関する知識は(「照合」と同じような)熟考を通して、自己知識を高める機会を提供する。

礼の徳について考えたチェン・イー(テイイ)(1033-1105)(朱子に近い新儒教の先輩)は、礼と理を同一視した。要するに、「礼に反するものは何であれ、理に反する」と彼は言った。このように、チェン・イーは他人をどのように扱うべきかに関する主要な古典的な儒教の基準を新儒教における知識(原理)の基準及び基礎とリンクした。その後の成句では、「人々はこの心と一致し、心はこの原理と一致する」という。自己知識は我々が他の人々を理解するのを助け、そして、逆もまた同様で、他の人々に関する知識は私たちが自分自身を知り、自分と他人をより良くするのを助ける。

統一認識論は原則として知識の範囲に他人についての知識も含む。しかし、上に見たように、統一認識論の現在の表現においては、外部の物に関する知識に焦点を当てている。それ故、自己と他人に関する知識にとって重要であろう人間の属性はあまり強調されない。統一認識論の現版は、我々が最も関心のある人格の諸相など、人間(他人と我々)のそのような特質に関する説明を省いている。個人的な知識(我々および他人に関する知識)に我々が興味を持っていることを認めてはいるが、そのような知識のメカニズムと基準についてのさらに詳細な説明の必要がある。

「個人的知識」という用語は役に立つ。なぜなら、それはすべての人間間の知識に人間主体もまた関与していることを想起させてくれるからである。内的に経験した精神的かつ情的な状態と他人の中で観察されるそのような状態の外的なサインの間には、継続する「照合」のプロセスがある。このようにして、我々は他人の幸福に関する判断を形成し、また、自分自身の自己知識をチェックするようになるのである。

統一認識論をさらに発展させるに際して、「原型の原理」はまたは他人の知識にも適用することができる。この場合、「原型」には、人体の物理的な特性だけでなく、自分自身の人間の心の完全なニュアンスも含まれる。その結果として、人は自分自身の心のニュアンスをより十分に意識すればするほど、その人はより十分に他人に関する感情移入の知識を持つことができるであろう。「相互主義の原理」によって、このような他人に関する知識はまた自分自身の自己知識と自己の理解を深めることができる。この種の個人的知識はそれ自体が「知られている間に知る」という相互主義の原理である。個人的知識のこのような面は、「照合」という統一思想の用語によって見事に把握されている。正に、相互関係は、我々が認識を通して学ぶ最も深くかつ個人的に意義あるものの一つである。



## D. 靈的知識 Spiritual Knowledge

新儒教の「理」の概念の強さの 1 つは、それが我々の経験する世界を物質的なものと靈的なものに分けないということである。「理」(および「氣」)はより普通に知覚される物理的な現実と同様に靈的な現実をも含んでいる。かくして、新儒教の認識論は現世の見える世界の認識の原理を見えない懐かしい現実の実体である靈界にまで自然に拡張することを示唆している。このように、相互主義の原則を認識の主体よりもより高い秩序の認識の対象へ適用するように拡大することができるのである。

朱子にとって、すべての現実の現象は「理」によって治められている。朱子は弟子たちに、幽霊や精霊(鬼神)、さらには天の主まですべては「理」を遵守するのであり、それによって、あらゆる現実の現象の性質や特質が確立すると言った。新儒者は、西洋的な意味での唯物論者ではなく、靈的存在の存在を認める。しかし、彼らにとっては幽霊や精霊も原理原則に従わなければならないのであり、その意味では、「合理的」(知覚可能、知ることができる)と主張する。

孔子の弟子のひとりが知識や知恵について尋ねたとき、孔子は次のような助言を与えた。「幽霊や精霊を尊重せよ。しかし、距離を保て。」孔子にとって、靈的知識は人間の重要な知識の範囲にはっきりと含まれているが、靈の世界との交流に夢中になったり、巻き込まれてはいけないと警告して、それを抑制している。その代わり、靈的な存在と関係する適切な方法は人間関係の原則に基づいている。このことは、孔子が幽霊や精霊にどのように奉仕したらよいかという質問に対して、「まだ人間に奉仕することができないなら、どうして靈に奉仕することができようか」と応じたその答えのなかに示されている。新儒教者にとって、靈的存在との関係におけるこのような礼儀の感覚は靈的知識の重要な要素であり、原理的に理解する感覚を補足するものであった。靈的存在に関する知識との関係においても、「理は原理である」。

統一認識論は靈的認識と靈的知識の可能性をどのように扱うであろうか？ もともとの統一思想の本は、靈的認識に関するセクションで、靈的存在の認識について次のように言及している。

これらすべての他に、靈人の感覚に属する靈的直観やインスピレーションや超能力などの靈的認識がある。認識の意味を完全に明確にするためには、我々はこれらの分野に入らなければならない。(事実、これまで発明、発見、新しい理論の創造が靈的認識によるものであった場合がたくさんある。)しかし、意識的な靈的体験を持っている人々は非常に少ししかいないので、不要な誤解を避けるため、この時点ではこの問題の説明は省略することにする。

統一認識論のその後の版では、正統な認識論の範囲にこの種の靈的知識を含める挑戦をまだ取り上げていない。いずれは靈的現象の認識についても非常に明確かつ原理に基いたものとなるべきである。

統一認識論の外的なものの認識についての説明は、人体の小宇宙的な構造自体の中にあ

る「原型」に基づいているので、それに相当する霊体の内容と形に基づいた霊的な原型は存在するであろうか？「原型の原理」は霊的存在の認識にも適用できるであろうか？もしそうだとすれば、霊的な知覚と認識は自己自身の霊体(および霊心)の中の霊的な「原型」に基づくものであろう。我々は物理的な次元における原型を検証することができる。なぜなら、医学を通して人体の器官や細胞を研究することができるからである。しかし、おそらく、我々は霊体を信頼性をもって検出し、研究することができるようになることから遠くないであろう。

セクション A で、我々は万物のパターンの首尾一貫性について新儒教の「理」の概念と統一認識論の原型の概念の中で理解されることを論じた。統一原理が明らかにしたことを通して、更なる段階は、宇宙の首尾一貫したパターンを創造主および親なる神による知的で情愛のあるデザインであると見ることである。

最初の統一思想の本の認識論の章には興味をそそる脚注がある。そこには、神が人間の認識の「対象」である可能性があるとして次のように書かれている。

物だけではなく、人間および神さえも認識の対象になり得る。地位(位置)においては、神は人間の主体である。しかし、認識に関する限り、認識をするものが主体と見なされるので、神が対象になる。しかしながら、人間は神を具体的なイメージとして見ることはできない。神は心情を通して霊的に知ることができるだけである。

これまでのところ、神に関する知識は、霊的認識のキーポイントであるように思われるが、統一認識論ではまだ明確にされていないし、開発もされていない。

統一原理で明らかにされているように、神は心情の神である。このように神を知り、理解するためには、霊的な教えが必要である。しかし、我々には、我々自身の性相の「原型」もあり、またその原型に基づいて拡大された他の人々に関する知識もある。それ故、自己知識と他の人々に関する知識の両方が神に関する知識のための拡大された原型となるのである。

## E. 知識の限界と歪み

人間が歴史のいつかの時点で、「すべての物を完全に正確に」認識するようになり始めることは理論的には可能かもしれないが、人間の知識には限界がある。これらの限界は、外部のものに関する知識、自己知識、他人に関する知識、および霊的知識に関連して、個人としての我々各自および我々の全体に影響する。それ故、人間の知識について十分な説明をし、その発展を前進させるためには、知識のこうした限界を自覚し認めることが必須である。孔子によるものと考えられている知識の古典的定義によると、「知っている時に知っていると言い、知らない時に知らないと言う。それが知識である」。

明らかに、人間の知識は歴史において時間の経過とともに発展する。正に、すべてについて既に知られているという 19 世紀後半の確信は新しい概念とパラダイム・シフトによって繰り返し碎か

れてきた。統一原理の終末論は人間の科学的知識が一層急速に発展した事を「終末時代」の肯定的な印と述べている。統一原理は創造本然の人間の状態への復帰の摂理は内的及び外的の2つの型の無知の漸進的な克服と理解することができることを明白にしている。

しかしさらに検討すると、この「無知」は単に正確な知識の限界または欠如とか、成就する途中の単なる「未だ」ではない。むしろ、我々の知識には根本的な歪みがあるように見える。人間の知識は単に不完全であるだけでなく、偏ったり歪んだりしている。本来の善なる人間性は原則として肯定されるかもしれないが、我々が直接の自己知識を持っていて、かつそれを通して我々がすべての種類の知識を持っている実証的な自己自体に欠陥がある。真に包括的な認識論はこの歪みから生じる知識の諸問題とそれらの問題をいかに解決するかについて説明しなければならない。

新儒教者は、人間の心の核心には完全に善なる「理」があると主張するが、我々普通の人間は賢人ではないということ、および「理」を正確かつ首尾一貫して知覚し認識する我々の潜在的可能性が典型的に何かによって損なわれていることを確かに知っている。新儒教の認識論は、原理に関する人間の知識を「利己的な人間の欲望」(私欲)の概念によって、歪める干渉について説明する。利己的な人間欲望の相殺的な「牽引力」は、原理の認識をあいまいにし、世界にある普通の対象物の知覚と認識を汚染する。

もし我々の知覚や認識が歪められていなければ、すべての「理」は新儒教者が「天の原理」(天理)と呼んだ1つの包括的なパターンを形成するために結合していることを我々は知るであろう。道徳心理学に関して言えば、新儒教の「天理」は、統一思想の「本然の原理」と同種であり、かつ匹敵する。しかしながら、実際は我々は利己的な人間の欲望の故に、そのように天理を知覚しないのである。新儒教者は、天理と我々の注目を競う利己的な欲望(天理と人欲)の間に明確な二分を置いて反対する。

このような状況において、新儒教者は、「原理原則を徹底的に調べる」と言う「窮理」の態度と実践を勧める。これは、我々の理解を広め深めるためにすべてを投入することを意味するが、同時に真摯な態度で「万物」にアプローチすべきことを意味する。これをするために、彼らは、書物の研究と「安座」として知られる瞑想を含む自己修養の実践法を開発した。新儒教の安座の実践とは、反省をする実践であり、賢人の言葉や教えを自己の生活体験と「照合」するものである。これらの新儒教の自己修養の実践は、利己的な人間の欲望の影響を段階的に減少させ、天理をより十分に知るようになる漸進的なプロセスを目指すものであった。

統一認識論の現在の表現では認識を損なう歪める要素については議論していない。しかし、「人間の欲望」の干渉的牽引力に対応して、統一原理は「墮落性」について説明する。それは個人罪、連帯罪、遺伝罪、および原罪からなる4つのタイプの罪である。統一神学には、墮落性と悪の起源について聖書から多くを引用する詳細な説明があり、また統一思想の他の章でも悪について詳細に論じている。墮落性が認識を歪める効果を認めて、統一認識論はそれらの歪みを克

服し、知識を高める方法を明確に処方することができる。

外的な物の知識、自己知識、他人の知識、および霊的知識の四つの分野すべてにおける認識が墮落性の問題によって影響を受ける。「全体目的」よりも「個人目的」のために知覚し認識しようとする我々の傾向は、外部の物理的な対象物の認識でさえも歪んでいることを意味する。他の3つの知識の分野はこれらの歪曲する影響をもっと受けやすい。

このような状況では、認識の主体たる人間が正確に認識する可能性を増加するのを可能にすることができる実用的な方法を必要とする。例えば、経典を徹底的に読んで議論する統一訓読会の伝統は、新儒教の「窮理」の実践と実り多く関連している可能性がある。両者はともに、知識に対する障害を克服することができる能力を強化するために、原理と我々の実生活の環境との間の結合を実現することを目指した実践である。訓読会、祈り、清平修練所での役事などの統一運動の修養実践は本心を刺激し、利己的な人間欲望、墮落性、悪なる霊的な雰囲気の影響に対抗し、それによって知覚と認識の明晰さを増加させてくれる。統一認識論と新儒教の認識論の両方には、霊的な修養実践と明晰かつ正確な知識の現実的な可能性を高めることの間の直接的な関係がある。

## 結論：知識の目的

私たちは、「原型の原理」を通して、統一認識論の外的な物に関する知識についての説明を自己知識、他人に関する知識、および霊的知識に当然広げることができることを見てきた。

↑

較を提供することによって示唆しようと試みたものである。このように統一認識論の範囲を広げることは、統一思想の基本的な枠組みに合致している。なぜなら、そのような拡張された知識は人間生活の全体的な内容と目的に根本的に連結しているからである。人生の目的は神によって与えられた三大祝福、「生育せよ、繁殖せよ、主管せよ」、を成就することであると、統一原理では表現している。ひとたび知識と目的の間の連結が明らかにされれば、我々は、知識追求の適切な基準が三大祝福の成就を可能にするものであることを認めることができる。

第一祝福、すなわち、個性完成を成就するためには、自己知識および自己認識が必要である。したがって、自己の心身および心身の関係が認識の可能な対象でなければならない。それから、この第一祝福を達成する実践は我々の知識の全ての面に影響する歪み(利己的欲望、墮落性)の克服に向かう旅でもある。

第二祝福、すなわち、夫婦と家庭を通した善の繁殖、を成就するためには、他の人に関する知識、特に、家族関係が必要である。したがって、他の人々は認識のための潜在的対象でなければならない。第二祝福の知識は第一祝福の知識(内的)と第三祝福の知識(外的)を合わせたものである。なぜなら、我々は他の人々を認識の「対象」として観察し、また彼らの内的現実と我々

自身の内的現実を「分析」(「恕」－相互関係、自分自身に対する分析によって)するからである。第二祝福を達成するための実践を通して、他の人々に関する感情移入の知識が自分自身の自己知識と自己理解を広げ、かつ深める。

第三祝福、すなわち、愛による万物主管を成就するためには、万物に対する認識と知識が必要である。前述したように、統一認識論は認識と主管の間に直接の結合があるとする。「認識のない主管はなく、主管のない認識はない」。第三祝福を達成するための実践において、「照合」は両方の方向に働く。自然界における原理の感知は人間性の道徳的な感知と人生の目的、特に自己の人生、を補強する。その道徳的知覚が今度は外界の諸物の人間的意義に対する洞察を与えてくれる。

拡張された知識が三大祝福の成就に必要であるから、神によって与えられた認識の目的は人間が三大祝福の成就(人生の核心的目的)を可能にすることにあると行うことができよう。以下は認識における主体と対象の関係は任意的ではないという点の拡張である。人間は神によって知識(および価値)を探索する存在として創造されている。「統一思想要綱」の中で説明されているように、「神の創造目的において、心情(愛)が創造の動機であった。それ故、人間の本来の認識方法もまた愛を動機として万物を認識することである。」

三大祝福のすべては神を中心とした四位基台を通して成就するが故に、三大祝福のすべての成就において必ず霊的知識が適用されることは明らかである。それぞれの場合に、神に関する霊的知識は知識の他の面を適切に方向づけるために不可欠である。

したがって、神の愛を中心としたときにのみ、人間は万物の創造目的を理解して、それらに関する真の知識を得るであろう。

そのような真の知識を拡大して自己知識、他人に関する知識、および霊的知識を含むようにすることによって、我々は神によって「知られている」ように知り、愛されるように愛することによって、包括的な知識を経験するようになるのである。